

[外国語]

# 学びの質を高めるための、児童の個別最適な学びを 実現する手立てについて

— 小学校高学年外国語科の実践から —

堀 正人\*

## 1 主題設定の意図

中央教育審議会の『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～すべての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」（2021）は、子どもたちが学校や教師からの指示がないと、何をすればよいか分からず学びを止めてしまった実態から、自立した学習者を育てられていないことを課題に挙げた。また、「これからの学校教育においては、子供がICTも活用しながら自ら学習を調整しながら学んでいくことができるよう、『個に応じた指導』を充実することが必要である。」と述べ、学習者にとっての「個別最適な学び」の実現を求めている。

一方で、「個別最適な学び」は具体的にどう指導すればよいか分からないという疑問がある。「一人一人に合った学習を行う」イメージは浸透してきているものの、数十人の児童に対してそれぞれに合った指導を同時に行うにはどうしたらいいのだろうか。多くの教師がその概念や大切さを理解しているが、具体的な指導の形として効果的な実践ができていないのかは疑わしい状況である。筆者も小学校で授業を受け持つ中で、個別最適の指導に難しさを感じてきた。

文部科学省は「学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料」（2021）において、個別最適な学びを具体的な指導にするための3つのキーワードを示した。1つ目は、「学習の個性化」である。子どもの興味・関心・キャリア形成の方向性等に応じ、探究において課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現を行う等、教師が子ども一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子ども自身が学習が最適となるよう調整するというものである。社会の変化として、多様性を受け入れ、個性を伸ばしていく大切さが浸透する中、学びへのアプローチも個々に合わせて多様化できる授業環境を用意する必要性が読み取れる。

2つ目は「ICT活用」である。今後の教育課程の在り方については、学習指導要領において示された資質・能力の育成を着実に進めることが重要であり、そのためには新たに学校における基盤的なツールとなるICTも最大限活用しながら、多様な子どもたちを誰一人取り残すことなく育成することが必要であると述べている。しかし、西村（2021）は、「実際の教育現場では通信環境の問題・ICT機器の持ち帰りの問題・SNSとインターネットをめぐるトラブルなど課題が山積みし、具体的な導入方法について手探りの段階にある。」と述べ、これから解決すべきICT活用の課題を指摘している。そのような現状の中、1人1台タブレットが児童に支給され、教師はICTを活用して子どもの学習到達度等を把握したり、子どもがよりよい学びに生かせるよう工夫したりしている。

3つ目は、「指導の個別化」である。教師が支援の必要な子どもを重点的にサポートすることで、効果的な指導を実現することや、子ども一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うことを述べている。教師が当たり前のように行っている毎日の個別指導を見つめ直し、より幅をもった対応ができるようになる必要性が感じられる。

これまでの研究を概観すると、個別最適な学びと協働的な学び両面からの実践が多く、個別最適な学びに焦点を当てた実践は少数と感じた。個別最適な学びと協働的な学び両方において手立てを打つのが理想であるため、1年間の授業計画の中で教科・単元の性質に応じ、個別最適な学びと協働的な学びの比率を柔軟に変化させて取り入れることが、これからの授業研究に必要な要素であると考えた。著者は本研究における単元が、他者と交流する活動はあれど、共に考えを練り上げていく活動の必要感が薄いという理由から、個別最適な学びをメインに据えることが学びの深まりに適していると考えた。そこで、本研究では、個別最適な学びの「学習の個性化」「ICT活用」「指導の個別化」に焦点を当て

\*長岡市立日越小学校

た外国語科の実践を行うことで、意欲的に取り組む姿勢や学習の定着といった面において、小学校高学年児童の学びの質が向上する姿はどのように現れるか明らかにしていく。

## 2 研究の目的

本研究では、個別最適な学びを取り入れた実践により、児童の学びの質が高まった姿がどのように現れるか検証する。

## 3 実践研究の内容と方法

(1) 実施時期：2023年11月～12月

(2) 参加者：小学校5年生1学級25名（単元欠席者2名）

(3) 単元計画

① 実施単元：Unit7「What would you like?」（全7時間）

「自分のお店を作り、料理を注文し合ったり、値段をたずね合ったりしよう」

② ねらい

・料理を注文したり、値段をたずねたりする受け答えができる。

③ 学習表現

・What would you like? I'd like ○○.

・How much is it? It's ○○ dollars / yen.

・食べ物（bread, cake, corn soup…）

・飲み物（coffee, green tea…）

(4) 単元の構想と展開

① 「学習の個性化」を意識した言語活動の設定

新潟県長岡市教育センターは「長岡市授業イノベーション図」において、子どもの学びの質の向上を達成するための「個別最適な学び」と「協働的な学び」のイメージを示した。（右図は2024年度版）「個別最適な学び」を実現する要素を「課題を把握・発見する」「課題を解決する」「方法を選択し、追求する」と挙げ、具体的な指導に生かすことが意図されている。

学習の個性化を実現するために上記の「課題を把握・発見する」「課題を解決する」において子どもの学びの質を高める工夫を行う。まず単元を通した課題として、自分の店（店名とメニュー表）を作り、英語でやり取りすることを設定した。個人で創造性を発揮する

必要のある活動を取り入れることで、自分自身の課題として高い意識をもって取り組むことができる。次に、課題の把握・発見・解決では、児童がより意欲を高めていけるよう、総合的な学習の時間と社会科を関連させる。両教科では、稲作を中心とした農業と漁業について学習しており、米や魚の消費量が減っている現状を学んだ。特に稲作については、児童が地域の方と交流しながら長期間生育に携わったため関心が高い。そこで、店作りのテーマにおいて「米の消費量を増やすことを目的にした店」「魚の消費量を増やすことを目的にした店」を選択肢とした。また、「学区にあったらいい店」を3つ目の選択肢とした。子どもたちは入学から様々な活動を積み重ね、地元への理解や想いが深まっている。地域の方との交流も多く、関係性の深まりが感じられる。高学年になり行動範囲が広がることで、地理的な地元への理解も深まった。このような様子から、学区への想いが深い児童のための選択肢として有効になると考えた。選択肢を多くすることで児童同士の内容が被らず、やり取りを楽しめるとも考えた。

② 児童自身の学習調整と「ICT活用」

奈須（2021）は、「すべての子どもは、生まれながらにして有能な学び手です。学ぼうとしているし、学ぶ力をもっています。」と述べた上で、一人一人違う子どもたちを信頼し、学びにかかわる多くの決定を委ねる大切さを伝えている。そこで、長岡市授業イノベーション図の「方法を選択し、追求する」要素を取り入れ、児童の自己決定場面を2つ用意する。まず、上記のように児童が課題解決のための題材を3つの選択肢から選ぶ。次に、店のメニュー表を、手書きかオクリンク（ベネッセアプリ）のデジタル作成から選ぶ。個別最適な学びの「ICT活用」によって言語活動の幅が広がり、児童はより自分に合ったものを選択し、学びを追求していくことができる。



図1 長岡市授業イノベーション図

また、江口（2022）は、話すこと（発表）の活動において、児童がICT資料を用いて発表する活動を行ったところ、作成したカードを見ながら話すことができる安心感などから「発表に対する苦手意識が減り、発表の活動を肯定的にとらえる児童が増えた」と述べている。効果的なICT活用の一つとして、単元最後の交流の前の宣伝という形で本単元に取り入れる。

### ③ 「指導の個別化」の工夫

指導の個別化の第一歩は、支援の必要な児童を把握することである。そこで毎日の個別指導を見直し、ペアトークに教師が参加したり、振り返りカードを見取ったりすることで把握する。これまでの授業において消極的であったり困っていたりした児童には、教師と一緒に活動する場面を入れるなど、優先的に支援する。

## (5) 検証方法

### ①授業における児童の観察

### ②振り返りカードとその分析

### ③単元終了後アンケートの分析

「単元を終えた感想（自由記述）」「3つの選択肢から選んだお店の種類とその理由」「手書きかデジタル作成どちらを選んだかとその理由」「今回の学習表現を自信をもって言えるか」の4点アンケートを行った。

### ④パフォーマンステストの結果

「What ( ) would you like?」「I'd like ○○.」「How much is it?」「It's ○○ dollars / yen.」について、英文を見ないで言えるかどうか、児童が作成した店のメニューを活用して担任とペアトークを行い、評価した。

表1 単元計画

時数	□目標 ☆単元の構想と展開における手立て	・教科書の活動    ★単元のゴールに関わる活動 ○話すこと（やりとり）の活動    ◆話すこと（発表）の活動
1	□食べ物や飲み物、値段の言い方に慣れ、アニメーションの話の概要をつかもう。	・単元のアニメーションを見る    ○好きな食べ物を伝え合う ・ポインティングゲームを行う    ◆発表する（班、全体）
2	□料理を注文する丁寧な言い方を知ろう。 ☆「学習の個性化」を意識した言語活動	・チャンツを行う    ・映像を見て問題を解く ・リスニング問題を行う ★○教師の例示から、単元の最後に行う活動を伝える ★自分のお店で出したいメニューを考える ◆○友達が注文するものを当てるクイズを行う（全体）
3	□丁寧な言い方で料理を注文しよう。 ☆「学習の個性化」を意識した言語活動 児童自身の学習調整と「ICT活用」 「指導の個別化」の工夫	・チャンツを行う    ・○バランスのよい献立を注文する ・自分が一番食べたいものを書く ◆○一番食べたいものが同じ人の人数を予想し発表する（全体） ★自分のお店で出したいメニューを考える
4	□ものの値段をたずねたり答えたりする言い方を知ろう。 ☆児童自身の学習調整と「ICT活用」 「指導の個別化」の工夫	・映像を見て問題を解く    ・リスニング問題を解く ・チャンツを行う ★自分のお店で出したいメニューの値段を設定する
5	□ものの値段をたずね合おう。 ☆児童自身の学習調整と「ICT活用」 「指導の個別化」の工夫	・チャンツを行う    ・世界のものの値段を当てる ★○◆自分のお店で出すメニューの値段を当てるクイズを行う（ペア、班、全体） ・値段をたずねる文を書く
6	□自分で考えた店について、クラス全体に宣伝しよう。 ☆「学習の個性化」を意識した言語活動 児童自身の学習調整と「ICT活用」	・リスニング問題を解く ★◆自分たちで考えた店について、クラス全体に発表する
7	□自分たちで考えた店を出し、互いに値段を確かめて注文し合おう。 ☆「学習の個性化」を意識した言語活動 児童自身の学習調整と「ICT活用」	・映像を見て世界各国の料理を知る ★○出店し、互いに値段を確かめて注文し合う



#### 4 研究の実際

##### (1) 「学習の個性化」を意識した言語活動の設定

始めに、単元を通した言語活動に興味をもたせたいと考え、教師の手本を活用した導入を行った。まず、店作りの3つのテーマに合わせて教師が3パターンの店のメニュー表を考え、デジタルと手書きで作成した。次に、児童に無作為に配付し、教師が作ったお店でペアトークすることを提案した。児童は普段とは異なる活動に興味をもち、楽しんで交流した。活動後に、この単位において自分で作った店で交流することを提案したところ、驚きつつも「面白そう」と期待感のある様子であった。店のテーマの3つの選択肢の説明では、他教科での学習を生かしたり地元をイメージしたりするねらいに納得していた。

単元の各時間にメニュー表作りの時間を設定したところ、児童は意欲的に取り組んだ。休み時間や家庭での自主学習として授業時間外に進んで取り組む児童もいた。作成途中のメニューをもとに値段当てクイズを行うなど、言語活動を楽しみながら文法へ慣れ親しむ手立てとしても活用した。単元最後の交流の前には、お店のメニューを宣伝する時間を設定した。児童がメニュー表をテレビで映し、簡単な英語を使いながらクラス全体に宣伝した。それぞれの個性が店作りに表れており、和やかに宣伝を聞く時間となった。

最後の交流では、店員と客の役に分かれ、交代しながらやり取りを行った。紙・デジタルで作った店のメニュー表を活用し、英語での交流を楽しんだ。実際のお金や食べ物はなく、進んで身振り手振りを交え、本当の店でのやり取りのように取り組んでいた。「Come on!」と自分の店を売り込んだり、メニューのこだわりを詳しく説明したりと自分の作った店に対し、思いをもって取り組む様子が見られた。

パフォーマンステストでは、18名（78%）がすらすらと学習表現の4つの英文を話すことができた。話すまでに少し悩んだ児童は5名（22%）いたが、教師の助けを必要とせず、正しく話すことができた。実施者23名全員が会話を成り立たせることができた。

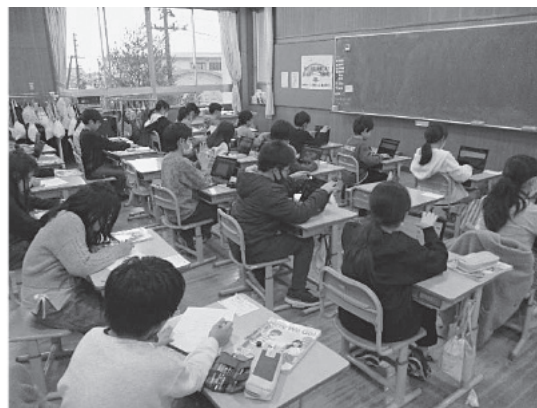


写真1 メニュー表作成の様子



写真2 メニュー宣伝の時間



写真3 交流の様子（手書き）



写真4 交流の様子（デジタル）

##### (2) 児童自身の学習調整と「ICT活用」

お店作りのテーマとなる3つの選択肢では、米の消費量を増やす店を選んだ児童が9名、魚の消費量を増やす店が5名、学区にあったらいい店が9名と比較的バランスよく分かれた。表現方法は、手書きが6名、デジタルが17名と1:3の割合でICT活用が多かった。デジタルでの資料作りは中学年からの経験で慣れており、色を使い分けたり、画像を取り込んだりと工夫していた。画像使用の際は出典を明記するよう指導した。手書きを選んだ児童は色鉛筆を使用し、メニュー表を飾り付けたり料理の絵を描いたりした。どちらの手立てにおいてもメニュー表作りにこだわりをもち、友達との会話が普段より少なくなるほど作成に夢中になる児童が多かった。

##### (3) 「指導の個別化」の工夫

ペアトークに教師が参加することで児童の様子を把握するだけでなく、直接指導したり努力を称賛したりすることができた。教師が多くの児童とペアトークする姿を見せることは、児童の交流するモチベーションを高めると感じた。振り返りカードは、誰に支援が必要なのか分かることに加え、学級の傾向として復習が必要な分野が把握できるよさがあった。実際に「100以上の数の言い方を覚えるのはなかなか難しい」との記述が複数あり、次時に全体指導を行うこ

とで必要な指導が適切なタイミングでできた。店のメニュー作りにおいてアイデアが浮かばない児童と一緒にメニューを考えた際は、納得するところまで到達するには時間が足りない場面があったものの、本番の交流には間に合わせることができた。

## 5 結果と考察

### (1) 課題に対する主体性が高い姿

単元終了後のアンケート（表2）では、店のテーマ選択の理由において「社会科で米の消費が減っていると知ったから増やせるようにしたい」など、他教科が動機付けとなった児童が6名いた。「学区にない店を作りたい」など、地元が動機付けになっている児童は6名いた。このように述べた児童の考えは、自分自身だけでなく他者や外部との関わりを内包するものであった。つまり、学級の半数の児童は、社会の一員としての視点で課題を捉えたと考えられる。「自分の好きな食べ物」「メニューを考えやすい」と自身の興味・関心や都合を学習の起点としている児童も学級の半数おり、課題を捉える抽象度は児童によって異なることが分かった。このことから児童一人一人の思考に合った動機付けを実現するためには、児童と関係の深い要素を複数課題に含めることが、個々の課題への最適性を高める上で大切になると考える。奈須（2021）は、児童が課題に対し「どんな教材でも自分に引きつけ、自分ごととして対象に肉薄しながら学ぼうとするのではないか」と述べており、学区や他教科での既習事項は教材を自分に引き付ける力を自然に引き出すための有効なキーワードになるのではないだろうか。

単元を終えての感想（自由記述）では、「一人一人の店が違って、話すのが楽しかった」「みんなでわいわい盛り上がりながらお店屋さんごっこをするのは楽しかった」など友達の考えを純粋に楽しんでおり、交流のよさを記述した児童は学級の半数の12名いた。単元の最後に交流が設定されることで、ゴールを軸とした思考が活性化され、準備や本番の活動に真剣に取り組む姿につながったと考える。

一方で、「メニューを考えるのが楽しくない」という児童が1名いた。これは上記の担任による指導の個別化の工夫が上手くいかなかった児童である。「あまりやる気にならない」という児童も1名いた。2名ともメニューを完成させ、交流自体は楽しんでいたものの、課題の内容に改善の余地があったことを示している。振り返ると、今回のメニュー表作成は、料理の内容や値段の決定に加え、デザインする要素もあり、自由度の高いものであった。創造的な思考に難しさを感じている児童にとって、今回の課題の難易度は高かったと言える。納得のいく自己決定の上で表現することができるよう、個別の支援において、教師が児童と対話をしながら、児童の内側にある思いを形にする。教師がそのような技量を高めていくことが必要であると考え。

### (2) 安心して最大限の思考・表現をしようとする姿

表現方法選択の理由（表3）から、児童は様々な判断基準をもっていることが分かった。最も多いと感じたのは、表現方法のメリットを比較していることである。「手書きの方が自由度が高い」「画像が活用できる」など2つの方法を比較している意見が多くを占めた。次は自分の好みである。「書き足すのが好き」「タイピングが得意・好き」など自身の好意的な感情を大切にしている児童もいた。最後に苦手の回避である。「タイピングが苦手」「書くのが面倒」などと自分にとってネガティブな要素を避けたいという思いが感じられた。「字がきれいになる」という意見も他者からの評価を気にしていると考えれば、同じ枠に入る。このことから教師が複数の選択肢を設定することは、児童が「方法のメリット比較」「自分の好み」「苦手の回避」の3つの判断基準を働かせ、自分に合った決定をしているという点で、自己調整能力を引き出していると考え。

また、今回はデジタルでの表現方法を選んだ児童の人数が、手書きの3倍程度であった。表3の「字がきれいになる」という理由からは、高学年の発達段階で顕著になる友達からの評価を気にしている様子が感じられるが、ICTの選択肢があることで、そのような不安をある程度解消できることが分かった。「簡単に作成できる」という理由は、書く

表2 テーマ選びの理由（回答者23人）

店のテーマ選びの理由	人数	
自分の好きな食べ物	8	35%
他教科との関わり	6	26%
自分の住んでいる地域との関わり	6	26%
メニューを考えやすい	3	13%

表3 表現方法選択の理由（回答者23人）

表現方法選択の理由		人数	
手書き	手書きの方が自由度が高い	3	13%
	書き足すのが好き	1	4%
	オリジナルの絵が描きたい	1	4%
	タイピングが苦手	1	4%
デジタル	タイピングが得意・好き	4	18%
	画像が活用できる	4	18%
	簡単に作成できる	4	18%
	字がきれいになる	2	9%
	書くのが面倒	1	4%
	好きな色が使いやすい	1	4%
	紙を使うのはもったいない	1	4%

ことに対して困難さを抱える児童が、安心して表現できた結果と言える。また、タイピングや画像活用への意欲が高い児童が最も多いことから、ICT使用そのものへの関心が特に高いことが分かった。中学年からの使用で慣れており、自信があることも影響していると考ええる。一方で、「タイピングが苦手」という理由で手書きを選ぶ児童が1名いた。家庭でのICT機器の普及により、自然にタイピングの力を付けている児童も多い中、普段の授業における練習の機会は多くない。楽しみながらタイピング練習に取り組めるコンテンツを紹介するなど、ICT活用の力を高める取組を定期的に行う必要性も感じた。ICTは安心感をもたらし、主体性を高めるツールであると考ええる。

## 6 成果と課題

教師が個別最適な学びを取り入れることで、多くの児童に合う課題を設定することができた。自分に合った課題に対し、自身に合った学び方を選択することで、高いパフォーマンスが発揮できる。一人一人のよさが引き出されると、自然と個性が光ったアウトプットになる。交流では、「〇〇さんの考えたものを知りたいから話したい」という児童の好奇心を感じる発言が多く聞かれた。友達の作成したものがとても気になるということは、児童は純粋な気持ちで他者との交流を楽しんでいると言える。一人一人の学びの質が高まることで、交流による学びの質も高まるのではないかと。協働的な学びにも大きく繋がる部分である。今回の実践から「学習の個性化」「ICT活用」「指導の個別化」を取り入れた実践を行うことによって学びの質が高まった姿は、「課題に対する主体性が高い姿」「安心して最大限の思考・表現をしようとする姿」「他者の考えを純粋な気持ちで楽しみ、交流しようとする姿」であると考ええる。

学びの定着という視点では、パフォーマンステストにおいて全員が合格点に達した。一方で、アンケート「今回の学習表現を自信をもって言えるか」では、否定的な回答となった児童が23人中5名（22%）いた。自信を付けるという観点において課題が残った。内容については、「It's 〇〇 dollars / yen.」のお金の言い方が難しかったとの感想が多かった。お金の言い方は、100の位や10の位など覚える要素が多い。改善策としては、具体物としてのお金を用意して交流するなど、より体験的に学ぶ活動を取り入れることが考えられる。

奈須（2021）は、「たとえ学ぶ内容は決まっても、工夫次第で自己決定の度合いを高めることは十分に可能で」と述べている。筆者は今回の実践で、教師からのトップダウンの要素を減らし、児童が創るボトムアップを増やすという工夫の大切さを感じた。学級担任という立場で、外国語に限らず普段の様々な教科から個別最適な学びを取り入れ、目の前の子どもたちの学びの質を高めていきたい。

## 7 引用・参考文献

江口宗俊（2022）「外国語におけるICTの活用ープレゼンテーション機能を活用した話すこと〔発表〕の実践ー」、『教育実践研究』、第32集、151～156。

中央教育審議会（2021）『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～すべての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）』

[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/079/sonota/1412985\\_00002.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/079/sonota/1412985_00002.htm)（2024年9月18日参照）

長岡市教育センター（2024）『長岡市授業イノベーション図』。

<https://www.city.nagaoka.niigata.jp/kosodate/cate03/edu-diver.html>（2024年9月18日参照）

奈須正裕（2021）『個別最適な学びと協働的な学び』、東洋館出版社。

西村実貴（2021）「ICTを活用した『個別最適な学び』と教室に関する研究ー学校内オルタナティブ教育の観察調査を通じてー」、『建築学教室卒業研究梗概集』、横浜国立大学建築学教室。

[https://ynu.repo.nii.ac.jp/?page=1&size=20&sort=-custom\\_sort&search\\_type=0&q=0](https://ynu.repo.nii.ac.jp/?page=1&size=20&sort=-custom_sort&search_type=0&q=0)（2024年9月18日参照）

文部科学省（2021）『学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料』 [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/senseiyouen/mext\\_01317.html](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/senseiyouen/mext_01317.html)（2024年9月18日参照）